

日付:2014年6月22日／聖書:エレミヤ書31:10～17

主題:「目から涙をぬぐいなさい」～「沖縄慰霊の日」を覚えて一平和主日礼拝～

今年も「沖縄慰霊の日」を迎える。戦後69年目になるが、長い年月が経過しても戦争の悲しみ、親や兄弟を失った悲しみはぬぐえない。毎年、糸満にある平和の礎に刻まれた名前をさすりながら涙するお年寄りの姿をよく見かける。平和の礎には、今年また新たに54人の名前が追加されて、現在、24万1,281人の名前が刻まれている。礎に刻まれている名前の多さに驚かされるが、単に数のことが強調されるのではなく、一人ひとりには、かけがえのない人生があったことを覚えなければならない。戦争が無ければ、もっと長生きして、より良い人生があったはずなのに。その人生、生活が断たれてしまったその悔しさと悲しさが湧き出るといことが大事であろうと思う。一人ひとりに向き合った戦争の悲惨さ、事実の継承が戦争を風化させないということに繋がるのかと思う。

「主はこう言われる。…苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む。息子たちはもういないのだから。主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。」この言葉の背景には、国の誤った判断が戦争を招き、多くの若者が戦争にかり出され、戦死し、敵国バビロンへ連行されることが語られている。「もう息子は帰ってこない」苦悩に満ちた嘆きの声、涙。慰めをも拒む母たちの姿がそこに記されている。この時代は、戦争へと向かうユダ国に対し警鐘を鳴らし続ける預言者エレミヤがいる。その警告を聞こうとしない時の王、時の政治家の姿がある。エレミヤは自分の身に危険がおよんでもなお語り続ける。結局エレミヤは、国家政策を妨害したとして捕らえられるが、皮肉なことにバビロニア帝国にユダ国の首都エルサレムが陥落した後、敵国バビロニア軍にエレミヤは救出された。そしてエレミヤは、バビロン側からこちらに来ないかと誘われ、それ相応の位を用意して迎えることを約束される。しかし、エレミヤは生涯エルサレムに残ることを告げて、廃墟となったユダ国、傷ついた民のために、主の慰めの言葉、希望の言葉を語り続けた。

預言者エレミヤは、この世の歴史、現状を見ていたからこそ、時の王に、政治家に警鐘を鳴らした。自ら危険を冒してでも。今日の預言者的役割を担わされている教会はどうか。教会は、きちんと歴史に、現状に向き合っているだろうか。戦争の悲劇を二度と起こしてならないために平和を築くことが教会には課せられている。その預言者的役割を担わせて頂く時、“目の涙をぬぐう”ということに繋がるのではないかと思う。

もう涙を流す歴史は作ってはいけない。「沖縄慰霊の日」を迎えるにあたって。(神谷)